

目には見えない『国境』

～根室現地研修(R5.12.25)体験レポート～

有水中学校2年
大西風優香

～得能宏さんの講話を聞いて～

得能さんは「ジョバンニの島」の主人公モデルであり、北方四島の一つである色丹島に住んでいた元島民である。旧ソ連に土地を奪われ、戦後3年目に故郷である色丹島から樺太に送還された。島に攻め込んできたソ連軍とその家族は、島民の住居を使い約34000人が住み始めた。樺太に送還されてからの生活は厳しく、寂しいものだった。毎日働かされ、食事も住居もあまり良くない環境だったという。ソ連軍が攻めてきたはじめの頃はロシア人と一緒に暮らしている中で良かったこともあったという。それは、子供の時から違う国の人と心で通じ合う力を育てることができたということだ。私は知らない人に話しかけるのは緊張するし難しいと思っていたが、これからはコミュニケーションを取ることを大事にしたい。得能さんの話の中で心に響いた言葉がある。“問題解決の意思を継いでいくのではなく、今すぐ解決すべき問題だ”...私は今まで、この問題は語り継いでいかなければならないとばかり思っていた。しかし、1日でも早く故郷に帰りたいと思っている島民の方々は大勢いらっしゃる。だから何年後に解決できればいいなどという考えではなく、この現状を知った人が協力して今にでも解決しなければならない。得能さんは、もし北方四島が返還されたら、先祖のお墓参りがしたいとおっしゃっていた。そして、自分の故郷をみんなに知ってもらい、ぜひ行ってみたいとのこと。



北方領土返還の 願いを込めて...

左上の写真は、根室市納沙布岬にある、北方領土返還祈念シンボル像の「四島のかけ橋」である。これには北方領土と日本がつながる日を願う意味が込められている。実際に見てみるととても大きく、迫力があつた。中央には「祈りの火」があつており、北方領土が返還されるまで消えない。シンボル像から少し離れたところに北方館というものがあり、そこで館長さんの話を聞いた。北方四島の住民のロシア人が日本との交流でここを訪れたときに、ロシア人はとてもモニュメントを気に入っていたのだそう。そして、ロシア人も平和を望んでいるということをおっしゃっていた。私はこの話を聞いて驚いた。ロシア人の中に、早く北方四島を日本に返したいと思っている人がいるということが嬉しかった。だが、国同士でとなると、やはり問題の解決は難しいとのこと。このモニュメントの向こうに歯舞群島や国後島が見えた。海岸には軍隊がいて、船が北方四島との海の間をラインを超えてしまうと攻撃される。日本の土地なのに、なぜ攻撃される必要があるのだろうか。目には見えない『国境』があるような気がした。

根室に生息する魚介

根室には歯舞漁港があり、豊かな海に囲まれているため様々な魚介が捕れる。根室で有名なのは、「花咲蟹」だ。研修2日目の朝食で、味噌汁に入っていた。花咲蟹の他にも、北海道でしか捕れない魚介がたくさんあつた。他にもマダラやカラフトマス、シロザケ、サメガレイなどがある。捕れた魚は外国に輸出することもあるそう。



根室に生息する動物

根室に生息する動物で有名なのはエゾジカである。研修中に何回か見かけた。大きな角を持っており、バスで近づいても逃げなかった。根室には名前に「エゾ(蝦夷)」がつく動物が多く生息している。北方領土に生息している「エトピリカ」の剥製もあつた。アイヌ語で「エト」は「くちばし」という意味があり、「ピリカ」は「美しい」という意味だ。北海道には「ゆめぴりか」という品種のブランド米がある。



～研修の感想・まとめ～

私は根室に行く前から高校生出前講座を受けたり、「ジョバンニの島」という北方領土に関する映画を見たりしていました。でも実際に資料館で学び、元島民の方の話を聞くと、これまでの自分の考え方が変わり、なぜ北方領土問題を解決しなければならないのか改めて意識させられました。根室市をバスで回っていると、所々に北方領土返還を訴える看板があり、このような活動が全国に広まれば問題を意識する人が増えると思いました。高校生出前講座で、私達が協力できるものとして署名活動がありました。根室の色々なところに署名用紙があり、誰でもできる良い活動だと思いました。根室でなくても、北方領土に関するイベントで行うこともあるので是非皆さんも参加してみてください。ロシアは今ウクライナと戦争をしており、国同士での北方領土問題の解決が難しい状況にあります。まずは国民の一人一人が“知る”事が大事です。私も北方領土問題の「情報発信者」になれるように頑張ります。